

## 【入選】

## ひとりぼっちの四国遍路 補遺

国際日本学部 歴史民俗学科3年 富士竜星

## 【前説あるいは発端】

例えば、周りに合わせようと思わない、わざわざ少数派を取りに行くような異端がいたら、彼らは幸せに生きることが出来るのだろうか。

例えば、と切り出したが、この異端は紛れもない私だ。元来、私は集団が嫌いだった。自分の個性を押しつぶし、周りに合わせようとするその姿が滑稽に思えたからだ。だから、私は遊軍のように、自分から所属に固執することなく、この社会を生きてきた。ただ、カリスマも力も持ち合わせていない私は、社会に異端との烙印を押し、いつしか皆という集団に含まれなくなった。

最初は気にしていなかったのだが、どうも最近隣の芝生は青く見えるらしい。周りに合わせようと思わないのにもかかわらず、孤立したくない、嫌われたくないという矛盾。そんな問題を孕んだ私は、この気持ちの解決方法が分からなかった。

そんなことを考えているとき、私の所属しているゼミで「四国遍路一人旅」を行うという追加課題が出された。ゼミ合宿で福岡に行くのだが、現地解散して一人で四国まで向かうというものだ。

しかも、上陸手段は船か歩きか自転車という指示付きだ。

具体的な上陸ルートは、他のゼミ生とかぶらないようにメールの先着順だった。私は最速で上陸したかったのだが、メール提出前日の深夜バイトで疲れ果て、うっかり寝過ごしてしまった。その結果、他のゼミ生に完全に遅れ、選べるルートは全部が遠回りだった。

そこで、私はあえて一番遠回りの福岡―鹿児島―大阪―和歌山―徳島というルートを選択し、福岡から鹿児島まではヒッチハイクで行こうと決めた。これは好奇心もあったが、冒頭で述べた矛盾を解決したかった。ヒッチハイクで何かヒントが得られるのではないかと思ったのだ。

これから綴るのは、異端扱いされている私が「四国遍路一人旅」に挑む、その前日譚。自分の幸せを考えながらヒッチハイクで九州を南下した、予測不能な出会いの物語である。

## 【0日目】かくして準備は滞る

16時ぐらい、ゼミ合宿の全日程が終了した。最

初は行く気にはなれなかったが、全てを体験した今、不覚にも来年も来たいと思ってしまった。と同時に、忘れていた現実に引き戻された。「四国遍路一人旅」である。思い出したくなかったなあ。

今いる場所は博多駅だ。ここからヒッチハイクで鹿児島県の志布志港まで向かわなければならぬ。とりあえず今日は遅いため、この地で一泊することにした。事前に予約したホテルは歩いて2時間半の距離があった。有り余る体力を信じ、私は重いバックパックを背負い、ただ舗装された道を歩き始めた。

歩きながら考えていたのは、この旅を終えた後に提出するエッセイのタイトルについてだ。旅の証明として、道中の出来事を文章にまとめることも課題の一つだった。

四国に上陸するまでは本編と変わらないが「家に帰るまでが遠足」理論と同じような感じで、道中に起こったものはまとめて四国遍路と言っているだろう。ならば、タイトルはこれしかない。

## 『ひとりぼっちの四国遍路』

そんなことを考えながら、車が多く通る大通り

から外れ、潮の香りと音がする道を、ただひたすらに歩き続けた。体力には余裕があったはずだが、肩に食い込む十キロほどの荷物が、じわじわと体力を奪っていく。無事にホテルに到着した頃には、足は完全に棒のようになっていた。

部屋に行くと、私は備え付けの大浴場へ向かった。ああ、極楽だ。五臓六腑に染み渡る、という表現は厳密には違うが、疲労困憊の体で浸かる湯はまさしく天国にも思えた。

至福の時間を終え、次に向かったのは、溜まりに溜まった洗濯物を片付けるためのコインランドリーだった。どうやら、ここはスマホで操作する方式らしい。私は物珍しそうに操作をした。だが、何度やっても「接続に失敗しました」というメッセージが繰り返されるばかり。ようやく接続が成功した時には、私の心は疲労と空腹でいらだっていた。私は持つてきた洗濯カゴの中身を、怒りに任せて洗濯ドラムの中にガバツとぶち込み、アプリで運転を開始した。

洗濯と乾燥には、およそ1時間ほどかかるらしい。その待ち時間を利用して、近くのスーパードで夕食を調達することにした。

スーパーへ向かう道中、大きな交差点で信号待ちをしている時だった。ふと、街の夜景を眺めながら、「へえ、こんな施設があるんだな」などと感心していた、その瞬間。背筋を冷たいものが走り抜けた。急激な、そして嫌な寒気。―財布がない。

恐らくランドリーだ。ドラムに洗濯物を入れた

ときに、一緒に財布を入れてしまった。私は慌ててランドリーに戻った。ドラムを緊急停止し、中を探ると私の革財布があった。だが、時すでに遅し。革はふやけ、現金もカード類もずぶ濡れだった。しかも、緊急停止させた洗濯機は完全に停止し、床には泡立った水が溢れ出している。

まあ、救出できただけ幸運だったと思うしかない。私は自分にそう言い聞かせ、とりあえず機械を復旧させるために、カスタマーサポートの番号に電話をかけた。

電話を終え、ようやく一息ついたのも束の間、さらなる悪寒が私を襲った。今度は、先ほどの比ではない、絶望的な寒気だった。

「ルームキーがない……」

最悪だ。慌てて走って戻ってきた道中で、ポケットから落としてしまったのだろう。しかも、それは昔ながらの鍵ではなくカードキータイプだ。夜の路上で見つけ出すのは、ほとんど不可能に近い。さらに、スマートフォンのバッテリー残量は、六、五、四パーセントと減っていく。今、この命綱が絶たれたら、私はホテルを予約しているにもかかわらず、野宿するしかなくなる。前代未聞の事態だ。これだから慣れない旅は嫌なのだ。およそ1時間が経過した頃だろうか。諦めかけた私の目に、街灯の光を反射するプラスチックの板が飛び込んできた。なんと、ルームキーだった。奇跡的に、ルームキーを発見できたのだ。ホテルの簡易スリッパはとうに壊れ、ほとんど裸足に近い状態だったが、そんなことはどうでもよかった。

安堵と喜びで、足の痛みなど感じなかった。

何とかホテルまで帰り着いた時、時刻はすでに未明を回っていた。明日のヒッチハイクに備えて早めに休むはずが、とんだハプニングの連続で、心身ともに限界だった。ただベッドに倒れ込み、そのまま意識を手放した。

「ひとりぼっちの四国遍路」、その初日は、これ以上ないほど最悪のスタートを切った。果たして、この旅は本当にうまくいくのだろうか。深い眠りに落ちる寸前、私の胸には、重い不安だけが鉛のように沈んでいた。

### 【一日目】善意で編まれた地図

朝8時に起床。私はさっそくヒッチハイクの準備をしてチェックアウトを済ませた。

この時点で私はとても緊張していた。如何せん初めてのヒッチハイクだ。当たり前前の感情だろう。チェックアウトの際、ついでに

「理由あって鹿児島までヒッチハイクを行わないといけないのですが、おすすめの場所はありませんか」

と聞くと、フロントは茫然とした。それもそのはず、今や絶滅危惧種のヒッチハイカーが目の前に、しかも風貌がよろしくない男が聞いているのだ。

それでも、丁寧に場所を教えてくれた。ホテルの向かいにある道路が、トラックの出入りが多くて良いらしい。

おすすめされた場所に移動し、私はバックバックから堂々とボードを掲げた。

### 『南九州方面』

これでいいのだろうか。右も左も分からないがとにかくやるしかなかった。私は恥じらいを捨て、思い切りボードを掲げた。道路を走っている車は、ボードを掲げている私を尻目にどんどん通り過ぎていった。

ああ、とても車からの視線が恥ずかしい。穴があつたら入りたいとはまさしくこのような気持ちなのだろうか。この時点で、もう辞めたかつた。

しかし、やっていくうちにその恥じらいはなくなっていく。ドライバーをよく観察すると、無視する者もいればこちらを見て笑う者、手を振って物珍しそうに対応する者、様々なドライバーがいることが分かる。笑ってくれたり、手を振ってくれると悪い気はしない。

ボードを掲げ始めて40分。1台の車が止まった。窓を覗くと女性が乗っていた。どうやら湯布院まで行くらしく、そこまで送ってくれるらしい。私は迷わず「お願いします！」と言って、後部座席に乗り込んだ。

初めてのヒッチハイクがこんなに簡単に成功したのはいいが、会話がなくて、なんだか気まずかった。気まずい沈黙を破るため、なぜ乗せてくれたのか聞くと「なんとなく？」と言われた。

そのような雰囲気の中、車が停車し、助手席に

もう一人の女性が乗り込んできた。どうやら、運転手は自営業で、今乗り込んできた女性は従業員なのだという。

二人の会話が始まる。私は話にまったく入っていけなかった。車が高速道路に乗ると、二人の話は、彼女たちの身内や恋愛の話へとシフトしていった。自慢ではないが、私は友人から「ノンデリカシー」といわれるほどには、デリカシーがないらしい。曰く「女性慣れしていない」とのこと

で、余計なことを言えない私は、二人の会話に全くついていけなかった。あれ、これ私の存在価値ないんじゃないか。

微かな疎外感を覚えつつも、いつ話を振られてもいいように、私は聞き耳を立てていた。内容はさっぱり理解できないが、観察対象としての「女子トーク」は、意外にも興味深いものだった。誰が誰と付き合っているのだの、誰のどういうところが我慢ならないのだの。その奔放な会話を聞きながら、同時に、私の悪口もどこかの誰かによって、こうして語られているのかもしれないな、などと考えると、なんだかやるせない気持ちになった。彼女らにしてみれば、それは日常の潤滑油であり、話のネタの一つでしかないのだろうか。

そこから1時間ほど経っただろうか。単調な車の揺れに眠気を誘われ始めた頃、車は高速を降りた。湯布院まで乗せていってもらうこともできたが、私は「道の駅ゆふいん」で降りしてもらうことにした。

道の駅に到着し、彼女たちと別れの挨拶を交わ

す。すると、売店で買ったのであろうホットドッグを私に手渡してくれた。受け取ったホットドッグは、いつもコンビニで買うそれとは違う、じんわりとした温かみのある味がした。

ホットドッグを食べ終えると、私は再び戦場へと戻った。道の駅の出口に近い歩道に立ち、ボードを掲げる。

### 『南九州方面』

1時間くらい経ったとき、道の駅の駐車場からサラリーマンが手招きをしてきた。話を聞くと米良まで送ってくれるという。ただ、地名を言われても分からない私はすぐに「お願いします！」と言った。

車内で会話を試みる。今回は、ただひたすらに深掘りをしてみることにした。これがなかなか難しかった。意外に質問が思いつかないのだ。それでも、車内にはサラリーマンと私しかいないので、無理やり共通点を見つけた。それが功を奏したのか意外に盛り上がった。そのため、次の所に到着するまで話題には困らなかつた。

米良ICの目の前に到着すると、私は降りしてもらった。途中、別府湾SAで降りしてもらおう方法もあったのだが、少しでも先に進む方を選んだ。休んでいる暇はない。私はすぐに車が停まれそうなスペースを見つけ、再びボードを掲げた。内容は相変わらず抽象的な『南九州方面』だ。

40分ほど粘ったが、ここは一般道とはいえず、高速を降りてきたばかりの車ばかり。ほとんどの車

が時速70キロ、酷い車は90キロ近いスピードで目の前を走り去っていく。これでは、停まりたくても停まれないだろう。というか、そもそもこちらに気づいてすらいない車が大半だ。私は作戦を変更し、30分ほど歩いて市街地へと移動した。

市街地へ移動し、再びボードを掲げる。目の前は介護施設で、職員の方々や、窓際に座るおばあちゃんたちが、物珍しそうにこちらを眺めていた。特におばあちゃんたちの視線は、まるで小動物でも見るかのように、純粹な好奇心に満ちている。見世物じゃないぞ、と心の中で思ってしまった。30分経った頃、軽自動車が私に近づいてきた。「家まで帰るところなんだけど、乗せていこうか？」

窓から顔を出したのは、優しそうなお母さん、といった雰囲気的女性だった。

「ありがとうございます！どちらまで行かれますか？」

と聞いたが、この地理に詳しくなかった私には聞き取れなかった。そのため、私は聞き方を変えた。

「宮崎には、近づきますか？」

「近づくとよ」

その言葉を聞いて、私は喜んで乗せてもらうことにした。

3人目のドライバーは、太陽のような明るい笑顔が印象的なお母さんだった。仕事帰りなのだという。後で詳しく聞いたことだが、彼女は自営業で、庭のデザインや手入れをする、いわゆる庭師

のような仕事をしているらしい。

軽く世間話をしていけると、彼女は突然、とんでもないことを言い出した。

「もしよかったら、うちに泊まっていく？」

この瞬間、私の頭はフル回転を始めた。初対面の、しかも素性の知れない若者を、家に泊めてくれるというのか。何か裏があるのではないか。怪しい勧誘の類ではないのか。どちらかというところ、善意よりも疑念の方が大きかった。

しかし、最終的には、私の押しに弱い性格と、「宿代が浮く」ということで、私は喜んでその申し出を受けさせていただくことにした。

彼女の自宅に到着した。車を降り家に上がらせていただく、まずその家の造りに度肝を抜かれた。聞けば、この家は自分たちで建てたのだという。普通の住宅ではありえないような家の造りと設計に驚いてしまった。家には、彼女とご主人、そして娘さんの三人で住んでいるらしい。

その後、30分しないうちにご主人が帰ってきた。挨拶をすると、彼は快活な笑顔で私を迎え入れてくれた。そして驚いたことに、なんとご主人も、若い頃にヒッチハイクで旅をしていた経験があるのだという。なるほど。この夫婦は似た者同士なんだな。

今日は私の歓迎ということで、近くの温泉まで行くらしい。正直、大分の温泉を諦めていたので、思わず喜んでしまった。

温泉に到着し、男湯に入った。男湯は、ほとんどご主人と2人きりだった。湯につかっている

と、ご主人はこれまでの旅の経験を私に共有してくれた。なんと、昔は世界各地を回っていたことがあるらしい。その旅では、いかに日本が恵まれているか、安心できるかということを学んだという。

温泉から上がり、お母さんたちと合流すると、近くのレストランまで行き、夕食までごちそうになっちゃった。食事中も、様々な話で盛り上がった。私が将来、教職に就くつもりだと伝えると、話題は自然と日本の教育問題へと移った。中でも歴史教育のあり方について、ご主人は熱く語った。「今の日本の歴史教育は、伝え方がおかしい。あまりにも自虐史観に偏りすぎている」と。確かに私もそう感じることはないわけではない。ご主人からは、教壇に立った際には、特定のイデオロギーに偏らない、フラットな視点で歴史を教えてあげてほしい、と強く言われた。

家に戻ると、今度は二次会が始まる。「いやさか」と乾杯した。どうやら、戦前では乾杯ではなく「弥栄」と発声していたらしい。

頂いたビールを飲み干すと、次は焼酎が出てきた。しかし、それはグラスで飲むのではなく、「ウスキボウル」という、この地方独特の方式で振る舞われた。深めの大きな器に焼酎と水、そしてたつぷりのカボスを入れ、度数に応じて水で割り、柄杓で掬って飲むのだ。「こんな飲み方があるんですね」と感心すると、やはり最近では知らない人が多い、とご主人は少し寂しそうにしていた。

二次会が終わると、用意してもらった客間で横

になった。今日起きたことを思い出しながら窓の外から聞こえる鈴虫の鳴き声が心地良かった。なんだか、しんみりとした気持ちになる。

明日も、ヒッチハイクはうまくいくのだろうか。そんな漠然とした心配をよそに、私は心地よい疲労感に包まれながら、深い眠りへと落ちていった。

【2日目】人生のカレイドスコープ、その先にある港

朝6時。庭師の朝は早い。

リビングへ向かい、「おはようございます」と挨拶をすると、お母さんがすでに朝食の準備をしてれていた。私のために、大きなおにぎりを2つと、アイスコーヒーをこしらえてくれたらしい。もしもの時のために、とペットボトルのお茶まで持たせてくれた。

お母さんと娘さんとはお別れだ。私は色々良くしてもらったことを感謝し、別れの挨拶を告げた後、ご主人の軽トラに乗り込んだ。

佐伯ICまでは40分ほどの道のりだ。軽トラが山道を走る間、2人で雑談をした。

すると、彼も名残惜しいと感じてくれたのか、彼の人生観について語ってくれた。なぜこの地に住んでいるのか、これまでの旅でなにを得たのか。

そして言われたのは、「自分の幸せは自分の物差しで決める」ということだ。正直、私はこんな山奥で暮らしていて不便ではないかと思っていた。近くの市街地に行くには、おおよそ30分ぐら

いかかるからだ。それを見透かされたのか、それとも私がヒッチハイクをやっている本質的な理由を見透かされたのかは分からないが、おもむろに言われた。

その言葉に私はハッとした。確かにいつまでも人の物差しで幸せを計っていたら、いつまで経っても幸せにはなれない。当たり前のことだが、その当たり前を言えることに私は驚いた。しかし、そのマインドを実行できる者はどれだけののだろうか。

そんな話をしているうちに、軽トラは目的地のインターチェンジに到着した。最後に固い握手を交わし、激励の言葉を受けて別れた。

さて、今日もうまくいくだろうか。昨日は、幸運が重なって驚くほどうまくいった。しかし、今日その保証はどこにもない。ヒッチハイクに慣れた、という感覚はまだなかった。

私は、昨日と同じようにボードを取り出し、ご主人からのアドバイスを従って、次の目的地を書き込んだ。

### 『延岡』

ボードを掲げて2時間経ったぐらいだろうか。あの後、一向に車は捕まらなかった。この道は若い女性が多いが、彼女らからの視線が痛い……

どうやら今日はいないらしい……と思っていたら、そこに黒い軽自動車が止まった。聞くと、まだパチンコ屋が開いていないので延岡まで送ってくれるらしい。

車に乗り込んで、私はその異変に気づいた。車内が明らかに荒れている。後部座席に至っては、様々な物が散乱し足の踏み場もない。さては、やばい人の車に乗り込んでしまったか、と一瞬身構えたが、どうやら飼っている猫が、毎回車内を荒らしていくらしい。それにしても限度がある気がするが……

その後も身構えていたが、特段何もなかった。乗せてくれたお父さんは陽気な人で、話を面白おかしく聞いた。

当初は延岡までだったのが、地理的に良くないということで、道の駅つまで送ってくれた。これは思わぬ幸運だ。お父さんは、別れ際に荒れている後部座席からビスケットを取り出して私に持たせてくれた。ああ、後ろのモノつてパチンコ屋の景品か……

お父さんと別れた後、私は再びボードを掲げた。次は『宮崎』だ。

ここでも2時間経った。今日は猛暑日らしく、頭が回らなくなってきた。やばいと思っていると、後ろからお父さん、というか見るからにおじいちゃんな風貌の人に声を掛けられた。なんと、宮崎南部の岬まで行くらしく、途中まで乗っけてくれるらしい。さらに、お腹は空いているかと聞かれたので迷わず「ペコペコです！」と言ったら、ラーメンまでおごってもらった。

食事を済ませておじいちゃんの車に乗った。軽く世間話をしたが、おじいちゃんは学生時代にヒッチハイクと自転車それぞれ日本一周したら

しい。こうして、大人になった今も、時間があるごとに日本や世界を回っているという。彼の話を聞いていると、この時代の人間が持つ、底知れないエネルギーのようなものを感じずにはいられなかった。

1時間ほど談話を重ねているうちに宮崎市内に入った。宮崎ICの近くで降りてもらい、おじいちゃんとは別れた。

さて、宮崎ICの近くは片側2車線、場所によっては3車線もある、ほとんどバイパスのような道路だった。正直、どの車もかなりのスピードを出しており、ヒッチハイクには不向きな場所だ。しかしもう後戻りはできない。私は意を決して、ボードを高く掲げた。

### 『都城』

ここは、これまでの場所とは違い、同年代の若者が運転する車も多い。そのため、明らかにこちらを嘲笑うかのような、意地の悪い笑みを浮かべて通り過ぎていく車も目についた。やっぱり、『普通』から外れている者に対する目は厳しいらしい。

1時間もおからないうちに、私の目の前に1台の車が停車した。窓から顔を出したお兄さんが、「ちよつと都城まで女の子に会いに行くところだから」と言い、途中の道の駅まで乗せていってくれるという。

デート前なのかなと思いつつ私は乗った。これまでの経緯を話すと「なるほど、訳アリですね！」

と言われた。間違っではないのだが、なんだか勘違いされている気がする。ただ、なんだか、この人とは同じシンパシーを感じる。常識のレールから少しだけみ出した、「外れ値」のような人間に、積極的にかかわりにいくタイプ。そんな感じ。

仕事はなにをしているのか聞くと、どうやら彼は風俗関係のお店の経営者であり、これから採用する予定の子に会いに行くところらしい。つまり、「女の子に会いに行く」というのは、デートではなく、一種の営業活動だったのだ。無意識のうち抱いていたバイアスを、見事に打ち砕かれた。と同時に、正直、やばい人にあたってしまったと思った。しかし、恐怖心より好奇心が強かった私は少し踏み込んだ質問をした。

「そういうお仕事って、世間からの風当たりが強んじゃないですか」

少しの間が空いた。しまった、失礼なことを聞いてしまったか、と後悔したが、彼は少し考えした後、実に晴れやかな声で答えてくれた。

「風当たりなんか、全然気にしないでですよ。結局、金を稼いだやつこそが正義なんです」

ごもつともな意見だが、私にはその強靱なメンタルが羨ましく感じた。私じゃ絶対にできない思考だ。そう考えつつ、なぜこの業界に入ったのかも尋ねてみると、包み隠さず話してくれた。

学生の頃、絵に描いたようにグレた。その後、社会の隅に行き着いた先が風俗業界で、そこで様々な知識とノウハウを身につけ、独立して今に至るのだという。

グレるのは、何らかの要因がある。大抵は家庭環境によるものだ。愛情表現の裏返し、それがグレルことにつながる。だからこそ私は、家庭環境に左右されるような生徒を一人でも減らすために、自分の経験を活かして、子供たちの役に立ちたい。お兄さんの身の上の話だったが、私はいつの間にか、そんな教育への思いを、お兄さんに向かって熱弁してしまっていた。

高速を降り、道の駅へと向かう途中、最近スカウトした男性スタッフの話になった。この業界では、女の子を確保するために、女性慣れして、かつ、ほどよくイケメンな人材が不可欠らしい。先日、まさにそういう男性が道端にいたので、スカウトマンとして雇ったのだという。

正直、女性慣れしているというのは羨ましいと私は思ってしまった。私は他人に興味がない。自分に害がなければ干渉という立場をとっていない。そんな主義からか、特に異性とは関わる機会がない。おそらく、この状況こそが友達から「女性慣れしていない」と言われる所以なのだろう。正直、これまで困ってはいなかったたので放置していたが、さすがに社会人になってもこのままでは色々とまずいのではないかと、最近になって焦り始めている。

「女性慣れしてるって、すごいですね」

と私がぼつりと呟くと、君自身はどうなのかと尋ねられたので、「全く縁がないですね、部活一筋だったので」と答えた。すると、

「硬派って、かつこいいじゃないですか」  
と、彼は意外な言葉を返してきた。硬派というか、単に自分から関わりようとしていないだけなんだけどね、とは言えなかった。

道の駅都城に到着し、札を言って車を降りようとすると、お兄さんは「これ、カンパ」と言っていて、5千円札を私に差し出してきた。さすがに申し訳なさすぎるので固辞したが、それでも「これも投資だから」と譲らない。最終的に、私はそのご厚意を、「お接待」としてありがたく受け取ることにした。

ちなみに、お兄さんはこの後、面接に来た女の子にも、いくらかのお金を渡すらしい。私がある理由を尋ねると、彼は一言、「投資ですよ」と答えた。お兄さんにとって、投資は積極的にするべきものらしい。裏切られるのが怖いから他人に干渉しようとする私とは真反対だった。

お兄さんと別れた現在の時刻は、午後4時。もし今日中にフェリーに乗るのであれば、遅くとも午後5時半までには志布志港に到着しなければならぬ。ここから志布志港までは、車でおおよそ40分ほどの距離だ。多少の余裕を考慮しても、午後4時40分が、タイムリミットだろう。

私は覚悟を決め、教えられた都城志布志道路へとつながる道の端に立った。そして、最後の願いを込めて、ボードを掲げた。

### 『志布志』

ヒッチハイクを始めた当初は、あれほど恥ずか

しかったこの行為が、今では全く何の抵抗もなくなっている。むしろ、早く誰か拾ってくれ、とすら考えている。

何十分経ったのだろうか。1台の軽自動車、左ウインカーを点滅させながら、私の方へとゆっくり近づいてきた。

私は夢中で、運転席のお兄さんに声をかけた。

「すみません！ここから志布志港まで行きたいんですけど、行けますか!？」

すると、彼はあっさりと頷いてくれた。私は急いで車に乗り込んだ。

乗り込むと同時に、私はすぐに時計を確認した。時刻は午後4時35分。ギリギリだった。私はお兄さんに断りを入れた上で、フェリー会社に電話をかけ、無事に本日分の乗船チケットを予約することができた。こうして、ひとまず安堵した私は、運転手のお兄さんに、これまでの全てを話した。お兄さんは、全てを優しく包み込むような相槌を打ちながら、私の話を聞いてくれた。その穏やかな雰囲気、私は安心して、思わず色々なことを話してしまった。

その上で、お兄さんの職業を尋ねると、返ってきた言葉に、私は耳を疑った。「教員です」と彼は言った。なんと、中学校で理科を教えている先生だというのだ。私も教職を目指している身として、これほどの偶然があるだろうか。思わず、変な声が出てしまった。

いわば同業者、というにはおこがましいが、私はここぞとばかりに、教職に対する疑問をたくさんぶつけた。その中で、常勤なのか聞いたが、今は臨時任用職員なのだという。どうやら、以前脳の病気で倒れてしまって、今は臨時でプレッシャーを最小限にしているらしい。

普通なら、やるせなさを覚える話だが、彼を見ているとなんだかポジティブに捉えている気がした。いろんな経験をすれば、それだけ色濃い人生になり、深みが増してくる。だからこそ、どんなことが起きようが、どんなに失敗しようが、素直に捉えることが大切だと静かに語っていた。確かに、先生の話はどれも深みがあり、なにより自身身の軸を持って捉えている感じがする。

先生になるための指南を頂いているうちに、車は鹿児島県の志布志港に到着した。先生は、最後にお茶までご馳走してくれた。私は手を振って彼と別れた。こうして、私は鹿児島までのヒッチハイクを終えた。

18時30分、大阪に向けて船が出航した。聞こえるのは船のエンジン音と波の音だけである。私は沈みゆく夕日を見ながら、ここまでのヒッチハイクに思いを馳せた。

思い返せば、いろいろな人生を歩んだ人たちに拾われた。そして、どの人も、深みのある人生を歩んでいた。恐らく、周りに流されることなく自分の人生を歩んできているのだろう。その人生一

一つを深掘するのは、まさに歴史を習っているみたいで非常に興味深かった。

では、私はこのヒッチハイクを通じて、自分の問題に対しどのように感じたのか。

冒頭の問いに答えるならば、人並みの幸せではなくとも、異端は異端なりの幸せが掴めるのだと思う。このヒッチハイクで会った人たちは、どの人も自分の軸を持って、羨ましいほどに人生を謳歌していた。

きっと彼らも、最初は様々な葛藤があったのだと思う。それでも、周りから異端としての目を向けられても、社会が逆風でも、抗い続け自分の軸を得たのだろう。

今の私の境遇はきっとそのような逆風の最中だ。それでも、本当に素の自分をさらけ出して生きていきたい、自由に生きていきたいと思った。

私は自分の矛盾に解決を求めている。これは今すぐには解決はできないだろう。それでも解決はできなくても解消ならできる。ありきたりな結論になつてしまいが、このような境遇を乗り切るには、素の自分を愛してくれる友人を大切にしなければならぬ。いつか社会に認められるようになるまで、そしてなつてからも…。

そんな私の気持ちを尻目に、船は経由地の大阪まで、一人で宵闇の太平洋の中を突き進んでいた。

#### コメント

旅は思いがけないことが起こるものです。このエッセイのように。

このエッセイは、私が実際にヒッチハイクを行ったときの体験を文字にしたものです。同時進行で、ゼミ報告用のエッセイも作っていたのですが、そちらは合計4万字になったので、ゼミ報告用のエッセイには書いていない、私の心情を軸にして再構成しました。タイトルの「補遺」はそのためです。

ヒッチハイクで拾ってくれる方々は複雑な経験をしていて、ヒアリングした限りでは辛い時期もあったことが垣間見れました。それでも、皆さんは今を生き生きと過ごしている感じがしました。

私も、このヒッチハイクの経験を糧にして、自分なりの幸せを追求していきたいと思います。

最後に、この一人旅に携わった皆さん、最後まで読んでいただいた皆さん、本当にありがとうございます。またどこかでお会いしましょう。